

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

60歳の私にも

OB MESSAGE

通信教育部社会福祉学科卒業生 **福島恵美子**

はじめに

平成25年1月27日、社会福祉士国家試験会場の試験開始を待つ間の張り詰めた空気の中で、私は、卒業が目前にあること、そして今日この場に臨むことができた幸せを感じていました。「今更…」という思いと学びたい思いが交錯する中、反対されるのが怖くて家族に内緒で願書を出したこと、在学中に見送った父や義父母のことなど、介護や身内の死を経て6年を超えて実現する卒業と受験に、やっとここにたどり着けたという感慨と安堵の思いで試験の開始を待っていました。

不安と焦りの中での実習

実習に向けて本腰を入れなければと思った矢先の3年次に、同居する義母の介護が始まりました。続いた義父の介護生活でスクーリングの計画が立てられず、レポート提出も滞り、卒業が見えない状態に募る不安と焦り。それでも続けられたのは大学からの郵便物で入学を知った夫の、意外にも理解と協力があったからです。

義母と、その8ヶ月後に義父を見送った後の実習。この実習先の児童養護施設での経験が、私が福祉を学ぶ目的と方向性を見極めるために大きな意味を持つものとなりました。二人の小学生の女の子の、いわゆる“ままごと”遊びの会話の中に感じた福祉の必要性です。会話の内容はそれぞれの子どもが経験した自分の家庭の再現でしかなく、「お父さんが帰って来ないの…」 「一時保護所」 「お母さんに叩かれる…」 「児相の人が来るの」

などの言葉で描かれたそれぞれの家庭は、二人で遊んでいるにもかかわらず互いに交流がなく、社会性のない孤立した自分の世界だけの会話でした。知らないことは再現できないという当たり前のことに改めて気づき、それが子どもの成長過程、あるいは人生において何をもたらすのか。その孤立した好ましくない小さな世界から子供が一人で抜け出すことができるのだろうか。周りの人間が手を貸さなければこの子たちはどうなるのだろうか。

そんな思いから、福祉を学んだ証として国家試験を受けようという漠然とした目的は、若くもなく経験のない私が福祉の担い手として判断してもらえらるための手段の一つとなるように、資格を取りたい、合格したい、と強く思うように変わりました。

国家試験へ

「遅くとも10月には始めてください」と仰ったS先生の声に背中を押されて始めた受験勉強。当初は勉強方法が分からずに不安でしたが、ひたすら過去問題を解いたという知人のアドバイスで、過去問題を含む問題集を繰り返し解き、関係用語を理解するために試験対策用語辞典は端から端まで目を通しました。できる限り机に向かうために、スクーリングの仙台行き対策としていた東北をこよなく愛する旅行好きの母親を演じることに終止符を打ち、子どもたちに社会福祉士国家試験受験を宣言。記憶力と体力の衰えを嘆きつつ、それなら若い人の3倍でも4倍でも勉強すればいいと自分に言い聞かせながらの受験勉強は、「もっと勉強しておけばよかった」と後悔したくない一心からでした。

そして卒業へ

思えば、挫折することなく卒業そして国家試験に合格と、ここまで来ることができたのは夫の理解以上に事務局の方々からの“卒業”に向けた強く、温かいエールがあったからです。スクーリング時のそれは勿論のこと、メールで送られる言葉の向こうに支えてくれる人の存在を感じ、励まされ、東北福祉大学の学生であることを自覚させられ、決して一人ではないという大学や人とのつながりを感じることができたからです。

更に、卒業祝賀パーティーでの素晴らしい経験は忘れることができないでしょう。それぞれに異なる卒業までの道のりを振り返り、誰もが「頑張りましたね」「頑張りましたよ」と、自分の努力を認め、褒め、だからこそ人の努力も理解し、認め、賞賛を惜しまない。通信課程だからこそ味わえる喜びではないでしょうか。素晴らしい場を作ってください、卒業を一緒に喜んでくださった事務局の方々には心から感謝しています。

60歳の私にも

嬉しさの中に、少しだけ寂しさもあった卒業からひと月ほど経った頃、たとえ資格を持っていても、実務経験のない私がすぐに務まる所などあるはずもなく、それでも動き始めなくてはと思っていたところに、実習させていただいた児童養護施設の施設長さんから電話がありました。

60歳の私にも何か出番がありそうです。気がつけば、いつの間にか「今更…」という思いは私の中から消えていました。